

2015. 7. 19

『鍼灸の挑戦』刊行10年記念大シンポジウム

日本鍼灸学への試み～未来鍼灸としての日本鍼灸のために

於・グローバルテクノ中野研修センター

松田 博公

windhorse@nifty.com

2005年、『鍼灸の挑戦』が出たとき、「これはフォークロア（民話）にすぎない」とインターネットで鋭い批評を浴びせた匿名氏がいた。石田秀実さんも、『医道の日本』の書評で、皮肉を込めて、「好意に満ちたユートピア的なもの」になっていると述べている。

そのうえで、鍼灸医学の本質とは何か、現代医学との違い、科学化の問題点、鍼灸と社会との関係で注意すべき事柄など、自説を展開している。

I. 石田秀実さんの指摘

1. 鍼灸医学は生命の本質に根ざした医学である

生命体は自分で自分の身体を養い、組織し、変化する環境に合わせて絶えまなく身体全体のバランスを取っている。生命体のこの機能を、「オートポイエーシス」というが、それは身体を部品の結合と想定する現代医学の人間機械論のフィクションではとらえきれない。

身体を「変わり続けながら流れ、循環する気が養っている」と想定する鍼灸医学のフィクションの方がうまくとらえられる。

鍼灸医学は、現代医学の補完医療ではない。現代医学の部品修繕的方法を反省し、その欠陥を超え、生命そのものを捉え直す「もう一つの医学」として、現代医学と併用すべきものである。

2. 自然治癒力はあらゆる医学の共通項

現代医学の外科手術も、身体のオートポイエーシス機能、つまり自然治癒力に依拠している。ただ、現代医学は、人為だけで人間機械を修復できるという錯覚にとらわれている。

多くの代替医療は、自然治癒力を人が能動的に使える道具か薬のように考えている。鍼灸医学は、「人が関与しなくても空気のようにいつも働いている自然治癒力そのものの姿」を肯定的に評価する。

「(鍼灸医学では、) 自然治癒力は、人が用いる功利的な道具や不思議な力ではなく、生命自身の本質として把握されているのである。」

※この評論では語られていないが、生命が在ることそれ自体の価値、人が生きていくことそのものを大切にする存在論的哲学に立脚するのが鍼灸医学だと、石田さんは考えている。

3. 機械論的科学モデルでは、鍼灸医学は解明できない

『鍼灸の挑戦』に、機械論的に部分を分けて追いかけて、原因—結果論で自己の術を語る科学派の鍼灸医家の姿が描かれていることが、石田さんは気に入らない。

「変わり続ける全体の流れを類動パターンで捉える鍼灸医学本来の方法論はどこかに消え、変わらない実体＝機械として身体を認識した「現代医学の垂流としての鍼灸」がそこに産まれてしまっていることを、筆者はどこかで指摘すべきだった。」

「物質科学で語るとは、「同一性を帯びた物質と機械として記述された身体」という異なる身体フィクションに置き換えることだということへの自覚が、希薄なのである。(略) 古い鍼灸がようやくスタンダードな(?) 現代医学の真理(?) に置き換えられた、すべては機械フィクションで説明できるはずだという現代医学中心主義につながっていきかねない。」

「トリガーポイントとツボがかなりの確率で一致したという記述は、なんら科学的解明について語るものではなく、「ふたつの経験的代替医学間の言い換え可能性」を指摘しているだけだ。(略) なによりこの記述からは、肝腎の「流れとしての経絡」の科学的解明の可能性は、まったく出てきようもない。」

鍼灸医学は変化流動し続ける身体フィクションを前提としている。同一性を帯びた不変の物質を単位とする機械的実体モデルの因果機序では、うまく記述できないのではないか。

「そのこのところをあいまいにした、いたずらな科学的解明への期待は、誤解

の源になるだけだといったら酷であろうか。」

4. 鍼灸のスタンダード化の困難について

「現代中国で進められている強引な教科書的スタンダード化に多くの問題があること、肝心の老中医と称される経験豊かな中国の鍼灸医の多くが、新しいスタンダードに批判的であることは周知のことであろう。」

※中医学の教科書的スタンダードは、その後の10年で、グローバル・ビジネス戦略に乗り、世界標準化されようとしている。

現代医学の EBM（証拠に基づいた医学）に基づく国連主導のスタンダード化も、問題がある。

「EBM という方法は、機械的身体フィクションに特有の因果論と、統計学というそれとは相容れないはずの方法とが結合した怪物である。統計学は実験結果に因果論的秩序が見出せないときに用いられる方法だから、因果論と結びつけること自体が本当はおかしいのだ。そうした方法の無反省な流用から作られるスタンダードでは、鍼灸の本質の切捨てになることが予想される。」

やみくもに現代医学的な意味でのスタンダードを作ることが、必ずしもよいとはいえない。

「鍼灸のスタンダードを考えるなら、まず科学的な意味でのスタンダードという概念そのものの吟味から考え直すことが大切である。豊かで多様性を許すフレキシブルなスタンダードといった、従来のスタンダードの定義を覆すスタンダードが求められているのだ。」

5. 「薬のいない安価な医学」と「金持ち向けブランド商品」 ～社会のための鍼灸になっているか

「セルフケアの医学」や「安価な草の根医学」としての鍼灸医学を重要としながら、石田さんは、「そこには手放して喜べない側面もある」という。

現代の国家は、福祉国家としての性格を次第に薄くしようとしている。福祉や医療は階層化され、高額な医療はそれを支払える層だけのものになりつつある。

「鍼灸が安価な医学だとして導入されても、高額な先端医療がなくなるわけではない。(略) それを支払えない人々は、たとえば鍼灸医学やハーブ医学でのげということになったとき、それでも鍼灸の再評価と現代医学への導入はすばらしい、とばかり言っているだろうか。」

一方で鍼灸医学は、「セルフケア」「養生」などの自己責任論や自律とは正反対の方向からも、現代医学に導入されようとしている。「鍼灸というもうひとつの医学」を、「ほかとは違う差異ある商品」として売り込む方向である。

「そこでの鍼灸は、エキゾチックで不可思議な力を発揮する、気功やヨーガのような金持ち向けの「ブランド医療商品」である。こうした方向での再評価も、鍼灸医学にとって喜ぶべき事態なのかどうか、考えてみる必要があるだろう。」

Ⅱ. 鍼灸医学の本質を確認する「日本鍼灸学」が必要

鍼灸術が「流れ循環する気の医学」「自然治癒力（オートポイエーシス）の医学」であることは、『黄帝内経』（現存『素問』『靈枢』の便宜的な総称）では前提になっていたが、現代中医学では、影に隠れてしまっている。

現代中医学では、経絡の治療よりも特効穴治療に偏っているし、教科書に「自然治癒力」に類する概念はない。（「邪正闘争」「扶正祛邪」の正気は治療論的概念であり、自然治癒力という生命の本質を語る存在論的概念よりも狭い。）

「流れ循環する気の医学」「自然治癒力（オートポイエーシス）の医学」という鍼灸術の本質は、「日本鍼灸」の中にこそ、よく保持されているのではないか。そこにも、日本鍼灸学を構築する意味がある。

1. 日本鍼灸学構築の手順

(1) 『黄帝内経』から現代中医学までの歴史を、中国古代文化論を基礎に、原型論・段階論・現状論の三層構造で把握する。これが、日本鍼灸を映し出す「鏡」になる。

(2) 中国医学の三層構造を「鏡」として、中国医学（鍼灸）の種子が、日本の文化、思想の土壌でどんな花を咲かせてきたかを考察する。

中国医学はなぜ日本医学、日本鍼灸として変容したのか。それを検討することは、中国思想と照葉樹林列島の自然主義的な生命感覚との接合から生まれた「流れ循環する気」「自然治癒力（オートポイエーシス）」の日本医学思想を確認することになるだろう。

(3) 以上の作業を踏まえて、日本の現在の鍼灸の流派、傾向が位置づけられるなら、石田さんの語るように、強引にスタンダードを立てなくとも、多様で多彩な日本鍼灸の現状論をフレキシブルに、一つの座標軸上の地図として把握することができるだろう。

日本鍼灸というと、何か、日本的要素だけで作られた鍼灸術であるかのように考えられるかもしれないが、そうではない。日本鍼灸が独自に存在するのではなく、日本鍼灸は、中国医学（鍼灸）の変容型である。日本鍼灸は、中国的思想と日本的思想の二つの中心を持つ楕円と考えることができる。（各時代、時期、流派によって、中国的要素を強調するか、日本的要素に軸を置くかが異なっている。）

2. 役立ってくれる作業仮説

上の「中国医学（鍼灸）の種子が、日本の文化、思想の土壌でどんな花を咲かせてきたか」の検討において、役立つ文化変容に関する研究がある。

①丸山眞男の「古層」論

古来から日本の文化、思想、政治制度などは、ほとんど中国、朝鮮からの舶来品であった。しかし、日本人はそれらを元のまま受け入れたのではなく、変容させて受け入れている。そこには、どんな法則性が働いているのか。それを考えたのが、政治思想史家、丸山眞男の「古層」論である。

（1972年の論文「歴史意識の『古層』」『忠誠と反逆』ちくま学芸文庫、1984年の講演「原型・古層・執拗低音—日本思想史方法論についての私の歩み」『日本文化のかくれた形』岩波現代文庫など）

丸山は、『古事記』『日本書紀』などの神話や『太平記』など中世の戦記物を分析し、日本文化には、外来の文化を変容して受け入れる執拗低音（バッソ・オスティナート）のような意識の「古層」が働いていると考える。

それは、人間の作為（人為）よりも、おのずから「なる」ことを価値づける感覚であり、自然の「生成のエネルギー」の「いきほひ」を無条件に肯定する

態度、「つぎつぎに」移ろいゆく「いま」を肯定する歴史的楽天性である。それは、自然主義的な生命感覚といってよいだろう。（これが、「自然治癒力」の概念と親和性のある感性であることは、すぐ分かる）

使う概念は中国思想であるが、その配置、解釈には日本の感覚が深く関係しているというのである。このことは、「草木国土悉皆成仏」を唱えた日本仏教について考えれば、理解しやすい。

②山田慶児の「フィルター」論

同様のことを、日本医学の構造に当てはめ、より細かく分析したのが、科学思想史家、山田慶児である。山田は、どの民族（あるいは個人）も、知識、思想を取り入れる際に、「フィルター」で濾過し、変形させているという。その具体的な例を、山田は『医心方』に見ている。

（論文「日本医学事始」『歴史の中の病と医学』思文閣出版、1997 および続編の論文「反科学としての古方派医学」雑誌『思想』2006年5月号）

『医心方』三十卷（984年ごろ）は、鍼博士、丹波康頼が編纂した日本現存最古の医書であり、当時、中国から到来していた『諸病源候論』『千金方』『外台秘要方』など多くの六朝隋唐医学書の文章を含む。ところが、元の文章の引用の仕方が特異だというのである。このことは、石田さんも（恐らく山田以前に）指摘している。

どうということかという、中国医書にある、経脈、脈診、陰陽、五行、虚実、易などに関連する哲学的、理論的部分は、削除しているのである。これらの概念なしに中国伝統医学は成り立たない。だから、山田は「ここにおいて中国医学体系は確実に解体されはじめている」という。

中国医学の「段階論」にあたる六朝隋唐の医学書は、『黄帝内経』の天人合一観を建前としつつ、陰陽五行論、虚実補瀉論ほかの思想の枠組みにのっとり治療体系を立てている。その枠組みを取り払い、無体系のツボ療法に単純化しているである。

山田は、この操作をもたらした「フィルター」を次の項目にしている。

- (1) 認識における可視、可触信仰、実感主義 [ツボ療法化、脈論・脈診の排除]
- (2) 単純原則志向 [ツボ療法化、五行論、虚実論の削除、脈論・脈診の排除]
- (3) 理論的なものへの嫌悪と不信 [五行論、虚実論の削除、脈論・脈診の排除]

(4) 哲学、思想より効果に重きを置く実利主義、技術的思考 [ツボ療法化、五行論、虚実論の削除、脈論・脈診の排除]

これが、中国医学を取り入れ、日本医学を作る際の「原型」になり、さらに現在に至る日本の学問全体の性格を先取りしたというのが、山田の主張である。だから山田は、『医心方』を「予告の書」だといっている。

丸山眞男と山田慶児の議論から、日本では外来の文化、思想、学問を受け入れ、日本の文化、思想、学問を作る際に、かなり強力な変容の装置を作動させているという作業仮説を立てることができる。その意識の装置は、次のような機能を果たしていることになる。

- (1) 理論嫌悪
- (2) 実感主義、実利主義、技術的思考
- (3) 単純原則志向、シンプル化傾向
- (4) 自然主義的な生命感覚

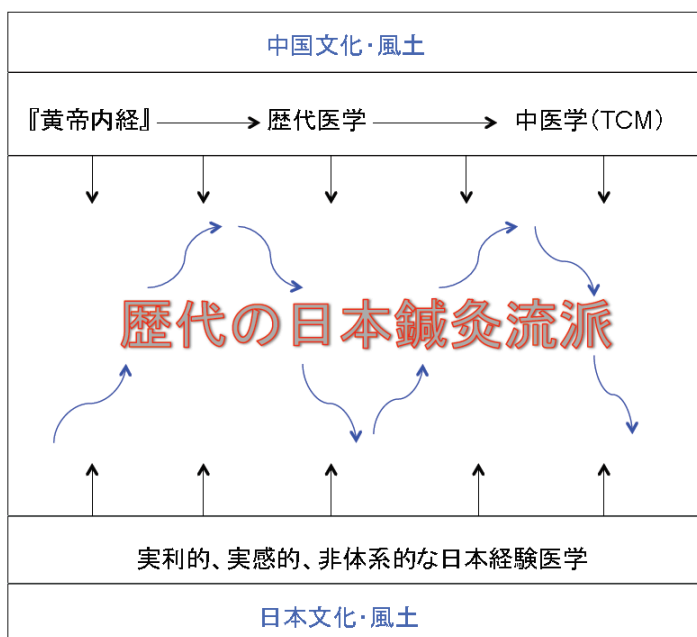
中国鍼灸を考える場合は、天人合一観や陰陽五行論など一つの中心を持つ円を想定すればよい。日本鍼灸の場合は、円ではなく、中心が二つある楕円の比喩がより当てはまる。二つの中心とは、中国的要素と日本的要素である。流派によって、時代によって、二つの中心が占める領域は異なっている。

論理

(輸入)

(フィルタ)

感性



伝統鍼灸各派が自身の、あるいは他流派の理論構成に不満で、それを改良しようとする場合、実感とシンプル化の日本的軸から、論理、図式、複雑化の中国的軸へと向かい、また逆の道をたどる。それは、道三流から打鍼術、現代の経絡治療各派の試みや中医学派まで変

わらぬ構造であり、そのような中国的要素と日本的要素との緊張関係の中で理論を構築し、わざを磨くのが、日本鍼灸の歴史なのである。

3. 原理論・段階論・現状論の区分で何が分かるか

歴史的三層区分論は、日本の敗戦後、新しい学問を作ろうと努力した経済学者、宇野弘蔵や物理学者、武谷三男の唱えた三段階論を踏まえている。要するに、歴史的な現象や概念には、最初の形があり、それがその後、発展し退化し変容して、現在に至っている、それを「原理論」「段階論」「現状論」と三層に区分すれば、過去、途中の変化、現状を、混同や混乱を避けてよく見通せるという考え方である。(鍼灸界には、歴史的段階の差異を無視し、混同した議論が多い。) 二、三の例証を挙げてみよう。

		「生き方」から「養生」へ	自然治癒力は消えた？
原理論 『黄帝内経』の医学	天人合一、気一元論、陰陽論、五行論、数術、蔵府経脈論、虚実補瀉論が渾然一体。黄老政治思想とも関係。天地宇宙教ともいべき総合的思想体系	天地と共に生きる「生き方」	天地の循環する気に合わせた生活で、病は自ずから癒える
段階論 各時代の中国医学	天地宇宙教、政治思想から治療体系が離床する	「養生」という健康論	「正気」が邪気を克服
現状論 現代中医学	伝統医学と現代医学との合作。史的唯物論と結合	「養生」は治療+ α 予防医学	邪正闘争 扶正祛邪 免疫力

◎「生き方」から「養生」への変化

原理論：『黄帝内経』の思想を中国医学の「原型」として整理すると、天人合一論、気一元論、陰陽論、五行論、蔵府経脈論、虚実補瀉論などが数術と絡み、渾然一体となって網の目状に展開され、黄老思想という政治思想とも深く結びついていることが分かる。つまり、天地、人体、万物は繋がっているという天地宇宙教の世界なのである。

約八万字のうち、「養生」の文字は八字だけであり、それも今で言う「養生（ようじょう・ようせい）」の意味ではない。そこで指示されているのは、「養生しなさい」ではなく、「人は天地の子である。天地と共に生きよ」という「生き方」なのである。治療論、健康論ではなく、人間存在の在り方を問う存在論であるといえ、分かりやすいだろう。

段階論：その後の中国医学は治療技術の水準の上昇とともに、政治思想と一体になった『黄帝内経』の天地宇宙教から治療体系を離床させていく。そして、全体的な「生き方」から、「養生という健康論」が特殊なジャンルとして自立していく。

現状論：現代医学と合作し、史的唯物論と結合した現代中医学では、「養生」は治療体系の外部に置かれる。そのうえで、プラス・アルファの領域とされるか、医療論的に予防医学とされる。

※現在の鍼灸臨床において、「養生」を強調し、指導することは、いうまでもなく大事だが、それは「現状」の医療を、「段階論」のレベルに戻す主張だということになる。『黄帝内経』が問う「生き方」という「原型論」のレベルまで戻せば、さらに豊かな臨床のイメージが開けるだろう。

◎中国の自然治癒力思想は医療体系から消えた？

原型論：『黄帝内経』には明示的な「自然治癒力」の概念はない。しかし、「天地の循環する気に合わせた生活で、病は自ずから癒える」という大前提のうえで医療を位置づけている。それを理解するための非常に分かりやすい材料が、丸山眞男が講義「日本思想史における「古層」の問題」で示した図である。

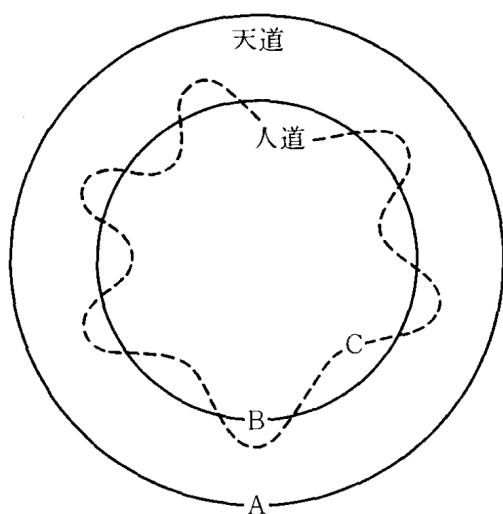


図-II 古代中国の世界像

「儒教、道教をふくめた古代中国の宇宙観をとらえると、こういう同心円になる。(A)が天道とか天命とかいわれるもので、易でいえば「天行は健なり自ら彊(つと)めて止まず」「天の神道を観るに、四時(春夏秋冬)たがわず」。天は完全な規則性をもって回る。春夏秋冬の順序が少しもたがわず永遠に循環する。これが天道で、自然界の「四時」は永久に変わらぬ規則性を持っている。

(B)が人である。人間の理想の境地は「天人合一」で、聖

人は、天道と完全に同心円を描く。普通の間人は、(C)のように、欲とか、老子のいう「作為」によって妨げられ、軌道がそれる。「道」を求めるといのは、天に順い同心円を描くよう生きることである。

これを自然法的な歴史観といえる。(A)が自然法で、これと同心円を描く規範意識が「道」という思想になる。天授とか、天命というときには「天」を人格化している。しかし天は「自然」だから、完全に人格神にはならない。その意味で天は絶対化されず、自然の法則性、四季の永遠の規則性ある循環が一番根底にある。儒教も老荘もその点は共通し、それが中国思想の「原型」である。」

中国古代の政治は、この理想の「原型」に従って構想された。この世界像は、そのまま『黄帝内経』の世界像に重なる。ひとの心身は、本来は天道と同心円を描き、四時と同じく永遠に変わらぬ規則性を持っている。しかし、普通の人間は同心円の線から外れてぐにゃぐにゃ曲がった人生の線を描く。それが病気になることである。そこで治療をし、天道に見合った同心円の軌跡を描かせてあげれば、病は天道の運行のままに自ずから治癒していく。政治も医学も同じ自然法的な宇宙像（天に法り、地に則る）を枠組みとして成立していた。

どこを採っても同じ論理構造という金太郎飴が、中国伝統思想なのである。

「天地の気の陰陽循環の法則に従えば生き、これに逆らえば死ぬ。これに従えば治まり、これに逆らえば乱れる」（『素問』四気調神大論篇）

「治療に際して、天の紀律にのっとらず、地の理法を用いなければ、災害が起こるだろう」（『素問』陰陽応象大論篇）」

※これは第一に政治の心得であり、それが医療に適用されたものである。

後の時代の治療論の先入観から『黄帝内経』を理解しようとする、**天人合一思想の『黄帝内経』形成に果たした決定的な役割を見落としてしまう。**

段階論：『漢書』芸文志・経方の部には「病になっても治療しなければ、**中程度の医者にかかったのと同じ効果がある**」と記されている。『傷寒論』第五十八条は、「発汗し、吐き、下痢をして、津液がなくなった患者でも、陰陽和した状態（**自然治癒力が調った**）であれば**必ず自然に治る**」と観察している。しかし、中国医学は、その事実を基礎に医学体系を立てることはせず、自然に任せては治癒しない病を人為で治す技術主義に邁進する。そして、存在論的な自然治癒力概念ではなく、邪気を克服する「正気」という治療論的な概念を発達させた。

現状論：現代中医学では、邪正闘争、扶正祛邪の「正気」として免疫力のように位置づけられる。（中医学も近年、「自愈力」を語るが、伝統医学にこの言葉はなく、西洋の代替医療の影響である。）

◎いまも保持される日本の自然治癒力思想

日本鍼灸の自然治癒力思想についても、この三層構造から理解できる。

原型論：万物に生命と霊性を見るアニミズムやシャーマニズムは、「原神道」として日本に長く機能した。新石器時代にはあらゆる民族共通の精神性だった

ものが、文明段階にも持続し、『古事記』『日本書紀』の神話に表現されているような、いのちの増殖を崇敬し、信頼する楽天的な自然主義的生命感覚として結実してきた。それは中国医学到来以前の民俗医療の「古層」の生命観でもあっただろう。

段階論：直輸入の中国医学は、『医心方』において、複雑で図式的な哲学、理論をはぎ取られ、大まかな生命感覚に合うツボ療法として技術化される。

その後、鎌倉時代までに仏教や易の影響下に、診断・治療部位として腹部を「太極」として特別視する医学が生まれる。室町時代には、陰陽五行、虚実補瀉の察証弁治を精緻化した明代医学を受容し、中国医学にシフトするが、それに反発する天台宗僧医による多賀法印流などの打鍼術が、一氣留滞論の原型のような主張を始める。長野仁、高松茂光らが、琵琶湖の近くの多賀大社から発掘した多賀法印流文献から、骨太な「日本医学宣言」を引用しよう。

「邪気は元来、動気にして神なり。これを散ぜんと思わば（病人の）首を切る。実邪漏らさず留めて正に成さば万病治するなり。邪正一如なる事を、明らかに知るべきなり。」（『医雑集下・四邪気』）

「万病の異名あるといえども、過不及の二つなり。過不及もまた不二なり。不及も太過も不及の正、困（つか）れ、水減りたるをいう。しかるに、万病に異なる証を付け医する故に正（気）、困れて気減り、重病と成す。元来、気、所々滞集するを病元とす。然る間、集まりたる気を散じ、滞りたる気を順巡さすれば、病自ずから治す。」（『一格正記・邪正一如』）

「元氣正しければ医せずとも病自ずから治す。傳燈いわく、我かつて病を治す事を知らずとなり。またいわく、病を治せんと思わば（病人の）首を切るべし。命は病、病は命となり。」（『一格正記・邪正一如』）

明代医学に立脚する曲直瀬道三流の「察証弁治」は、病態観察を治療法に結びつける画期的な方法であった。その影響下に、脈や腹、舌などを診て証を立てる諸々の流派が活動していたのだろう。しかし、その技法はいまやマニュアル化、形式化して効力は衰えているように多賀法印流の密教僧たちには見えた。

証を察し、証によって別々の方を立てる医師たちは、患者を病名や証候名で断片化し、部分的な治す技術を施し、正気を疲れさせ元気を減らし重病に追い込んでいる。いのちの根源を見よ。「命は病、病は命なり」。いのちも病も別のものではない。病や症状を通して甦ろうとするいのちの働きがある。自ら治るといふいのちの働きそれが如来の本意である。

（詳しくは、拙著『日本鍼灸へのまなざし』ヒューマンワールド、2010、松田博公対談集『日本鍼灸を求めてⅡ』緑書房、2013のあとがき解説を参照。）

ここには、中国医学との違いをはっきりと意識した、自覚的な日本の生命賛歌、自然治癒力への信頼がみられる。

江戸中期、後藤良山の**一氣留滞論**、吉益東洞の**万病一毒論**の源流は、少なくとも法印流文献がまとめられた江戸初期にさかのぼるだろう。一氣留滞論、万病一毒論などのシンプル化された医学思想は、江戸中期の「古方派」が言い出した、という定説は疑わしい。石田さんも、前からそのことを指摘している。

こうした日本的な生命感覚を受け皿として、江戸中期以降、蘭学が伝えたヒポクラテスの自然治癒力思想が日本に定着する。

幕末の平野重誠は、『病家須治(びょうかすち)』において述べる。

「すべて病で熱が出、腫瘍で膿をもつのも、みな身体の元気がその病毒を追
い払い、体外へ排除しようとするのである。これは自然作用力（テンネンノハ
タラキ）のなすところであり、医者はまだその足りない力を助け、病毒に対抗
する元気が負けないように、薬や鍼灸を用いるのである。作用力が病毒を排除
するのに十分ならば、必ずしも灸や薬の必要はなく病気は自然に治る」（巻之一
「みだりに薬をもちうべからざる心得を説く」（現代語訳は『病家須知』農山村文化協会、2006を参照した。）

明治の和田啓十郎は、『医界之鉄椎』で、当時の欧州医学の自然治癒力論を引用しながら述べる。

「もし害物来たりてこれを侵すものあれば、これに対して反応作用を起こし
て抵抗せんことを試む。その反応作用はすなわち発熱となり、喀痰となり、嘔
吐となり、下痢となり、膿潰となり、下血となる。人これを称して疾病という」。
コーンハイム氏、メチュニコッフ氏、レーベル氏、「以上三氏の所説によらばす
なわち、いわゆる疾病なるものは、病毒に対する身体の自然良能たる反応作用
にして、病まんがために病むものにあらずして、癒えんがために病まざるべ
からざるものなることを知らん」

国粹主義の思想家、中山忠直は、昭和初期のベストセラー『漢方医学の新研究』で、「自然治癒力を賦活するのは漢方、鍼灸である」と鼓吹し、鍼灸家だけでなく、霊術家、新宗教などに広く受け入れられていく。

「医家の務めは疾病の自然治癒を保護もしくは援助するにあるとして、洋医家は果たしてその実をあげつつありや。麻疹の如きは放任して自然経過を待つとも可なりと言うべき疾病であるが、その高熱を恐れて冷却法を施し、以て内

陥して肺炎を起こさしめるが如き、自家中毒より来たる湿疹面に対して塗布薬を処方し、内陥して腎臓炎を起こさしめるが如き、腸チブスを冷却して、死地に陥らしむるとき、果たして自然の機能を援助しつつあるものなりや、妨害しつつあるものなりや。洋方は自然治癒を放任するならまだしも、これを妨害するに至っては言語道断の医学ではないか。」「これに反し漢方の治療法は、自然治癒なる身体の生理的機能を、保護もしくは援助するを眼目とする。これぞ真の正道医術である。」

現状論：『鍼灸の挑戦』でのべたように。日本の鍼灸界には、「鍼灸が治すのではない。患者さんの自然治癒力が自ら治すのを、鍼灸は手伝っているだけだ」という共通認識が、いまなお漂っている。これは、日本鍼灸の存在論、哲学として定着しているのか、それとも、「古層」の生命感覚がヒポクラテス思想と結びついて生まれた、江戸中期、幕末、明治、大正、昭和とたどることのできる「空気」の残響なのだろうか。

※井上恵理は、講義録『南北経験醫方大成による病証論』（東洋はり医学会）で、風邪による熱を解説している。

「いわゆる風に入られるという事は虚なんです。しかし邪は入ったけれどこれに対して抵抗する力があるから熱になるんです。これを実といいます。だから虚中の実という事になるんです。体が本当に弱り切っていれば実証には絶対にならないんです。ある程度まで虚していて、そこに外邪が入ったから実証になるんです」

これはヒポクラテス的な見方である。日本鍼灸にとっては、発熱、下痢は病毒を排除しようとする治癒反応であり、自然治癒力の発現である。それらは熱邪、寒邪による否定的な症状だという中医学の見方とは異なるのである。

※日本人は、単純に先端医学、蘭学からヒポクラテスの自然治癒力（自然良能）思想を直輸入したのだろうか。そうではない。蘭学自体は、当時すでに機械論的医学になってい。その中から、自然治癒力思想の側面に注目したのは、自然主義的生命感覚という日本の「古層」に根ざした選択的フィルターの作用なのである。

このレジメのワードファイルは、都師会サイト「松塾コーナー」からダウンロードできます。

4年目の松塾・杉塾やっています！！

都師会会員・準会員・学生会員は無料、一般参加者は各回500円（資料代）

「《鍼灸の思想》を学ぶ会（松塾）」

毎月定例 第1土曜日午前10時～12時

会場：東京都はりきゅうあん摩マッサージ指圧師会（略称・都師会）

会館 3階会議室（連絡先は末尾を参照）

中国古代思想、日本文化論、生命論、仏教・神道思想、技術の思想、現代哲学などを絡め、ディスカッションしながら、黄帝内経、日本鍼灸の思想とわざの世界を浮き彫りにします

講師：松田博公（まつだ・ひろきみ）

鍼灸ジャーナリスト、『黄帝内経』研究者。著書に『鍼灸の挑戦』（岩波新書）、『日本鍼灸へのまなざし』（ヒューマンワールド）、『対談集 日本鍼灸を求めて I、II』（緑書房）、『福田稔の気血免疫治療』（共著、静風社）など。

「伝統鍼灸基礎講座（杉塾）」

毎月定例 第1日曜日午前10時～16時

会場：東京都港区芝5-18-2 東京都障害者福社会館 会議室

（JR田町駅近く）電話03-3455-6321（代表）

伝統鍼灸の基礎的な手ほどき。急性の患者さんにすぐ効果を発揮できる陽経中心の治療から始め、慢性疾患対応の陰経中心治療に及びます。脈診と体表観察を用い、『黄帝内経』の文章にも親しみます

講師：杉山勲（すぎやま・いさお）

研究団体「大成会」主宰。著書は、『鍼術速成講座』『鍼術上達講座』『鍼術完成講座』の三部作（緑書房）、『鍼灸院の患者が増える即効・陽経治療』『鍼灸いろは経・総論』『鍼灸いろは経・各論』（いずれも源草社）など多数。

※都師会サイトの松塾・杉塾コーナーから事前予約をお願いします。

公益社団法人東京都はり・きゅう・あん摩マッサージ指圧師会

〒101-0042 東京都千代田区神田東松下町37-4

電話03-3252-8811